

福島第一原発事故による避難生活に関する総合的調査

インタビュー調査報告書

平成 30 年 3 月

新 潟 県

目 次

1. 調査概要	1
2. インタビュー記録.....	4
(1) パターン A(区域内避難かつ世帯ごと避難).....	4
① 対象者 1	4
② 対象者 2	6
③ 対象者 3	8
(2) パターン B(区域内避難かつ世帯分離避難).....	10
① 対象者 4	10
② 対象者 5	12
(3) パターン C(区域外避難かつ世帯ごと避難).....	14
① 対象者 6	14
② 対象者 7	16
③ 対象者 8	18
(4) パターン D(区域外避難かつ世帯分離避難)	18
① 対象者 9	20
② 対象者 10	22
③ 対象者 11	24

1. 調査概要

1. 調査概要

(1) 調査目的

新潟県では、柏崎刈羽原子力発電所の再稼働の前提として、福島第一原発事故の徹底的な検証、原発事故が健康と生活に及ぼす影響の徹底的な検証、万一原発事故が起こった場合の安全な避難方法の徹底的な検証の、「3つの検証」を進めている。

本調査は、新潟県内に避難している、若しくは避難経験のある方を対象として、平成29年10月～11月にかけて実施したアンケート調査に加え、避難生活経験者の避難生活の経緯、避難生活において困ったこと・苦勞したこと、今後の意向など、避難生活における個々のエピソードを具体的にインタビュー形式で生の声を聴取し、避難生活の実態を明らかにすることを目的としている。

(2) 調査対象

パターン A：区域内避難かつ世帯ごと避難した人

パターン B：区域内避難かつ世帯分離避難した人

パターン C：区域外避難かつ世帯ごと避難した人

パターン D：区域外避難かつ世帯分離避難した人

(3) 調査手法

インタビュー形式

(4) 対象者一覧表

属性情報	対象者 1	対象者 2	対象者 3	対象者 4	対象者 5
パターン	A	A	A	B	B
避難形態	区域内避難	区域内避難	区域内避難	区域内避難	区域内避難
世帯分離	世帯ごと避難 (単身)	世帯ごと避難	世帯ごと避難	世帯分離	世帯分離
性別／年齢	男性／50代	男性／40代	男性／50代	男性／60代	男性／60代
現在の職業	無職	無職	正社員	無職	自営業
子ども有無 (小中高)	無し	有り	無し	無し	無し
経済状況	収入が減少	収入が減少	収入が減少	収入が減少	収入が減少
現生活満足度	不満	不満	無回答	不満	満足

属性情報	対象者 6	対象者 7	対象者 8	対象者 9	対象者 10	対象者 11
パターン	C	C	C	D	D	D
避難形態	区域外避難	区域外避難	区域外避難	区域外避難	区域外避難	区域外避難
世帯分離	世帯ごと避難 (単身)	世帯ごと避難	世帯ごと避難 (単身)	世帯分離	世帯分離	世帯分離
性別／年齢	男性／70代	男性／50代	男性／40代	男性／40代	女性／40代	女性／40代
現在の職業	無職	正社員	正社員	非正社員	自営業	非正社員
子ども有無 (小中高)	無し	有り	無し	無し	有り	有り
経済状況	収入が減少	収入が減少	収入が減少	収入が減少	収入が減少	無回答
現生活満足度	無回答	不満	満足	無回答	無回答	満足

(5) 調査時期

平成 29 年 12 月 15 日～平成 29 年 12 月 16 日

(6) 調査実施主体

インタビュー・分析：株式会社サーベイリサーチセンター

2. インタビュー記録

2. インタビュー記録

(1) パターン A(区域内避難かつ世帯ごと避難)

① 対象者 1

避難形態	世帯分離	性別／年齢	現在の職業	子ども有無(小中高)	経済状況	現生活満足度
区域内避難	世帯ごと避難(単身)	男性／50代	無職	無し	収入が減少	不満

◆避難経緯

- ・ 2人きりだった母とは10年前に死別、技術者として地元企業に勤務しながら公営住宅に暮らしていたところで被災した。
- ・ 地震後、街は停電になり公民館に避難。車や家財を持たずに避難するような指示もあり、毛布一枚で出てきた。最終的には新潟県の避難所まで移転を繰り返させられた。
- ・ 新潟県内の避難所で、避難元の自治体に問い合わせると、「原発が爆発したので政府の許可がないと戻ることはできない」と言われた。被災当初、原発情報の発表もなかったため余震から安全のためと思い家財を残して避難したため、悔いが残る。
- ・ 新潟県で借上げ住宅に落ち着くも、いつまた引っ越すか先が読めない不安から、家財道具の購入を極力控える生活を送っていた。
- ・ 福島県の災害復興住宅に4、5回の応募でようやく当選した。人気のエリアは抽選が多いので、人気のない地域に応募した。抽選ではあったが、全員が当選のような形だった。
- ・ 2017年11月からそちらで暮らすも、新潟県の避難居住地に比べ、買物にも車が必要な不便な地域になってしまった。住居費は東電が負担だが、駐車場代などは実費。新潟県に避難していたとき同様、住民とのコミュニケーション等を成立できず、半ば断念している。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 避難途中、避難所の移転を繰り返していた頃は寒さや、行き先が知らされない不安感、情報が入手できず、知人と連絡が取れないこと等で強いストレスがあった。
- ・ 車をはじめとする家財や思い出の品を家に残してきた悔いと、実生活の不便さが避難後も継続。当初、役場が住民票を置いて避難したため、後によりよく住民票の異動と車の購入ができたが、残してきた車を回収後に、避難先で購入した1台を手放す等の手間と無駄も発生した。

- ・ 新潟県の借上げ住宅に転居後も、いつまた移転することになるかが読めず、家財道具の購入を抑えての生活を送る。その間に補償は打切りになり、災害復興住宅の福島県の家では自分で多くの家財を買わなければならなくなった。住民税の申告も気付かずに遅れてしまい、3年分の就労補償が1年分の所得と同じ扱いになり200万円近くを請求されてしまった。
- ・ 被災前は正社員の技術者として勤務していたが、被災後の2011年3月末には「社員全員即日解雇。もし再開の場合は会社指名の再雇用があるかもしれない」という通知を受け取り失職。2011年6月に会社は他市で再興され、職安に求人も出されたが、声は掛からなかった。何度も本社や工場に連絡したが、たらい回しに遭い、積極的には応じてくれなかった。
- ・ 技術を活かしたい気持ちがあったが機会がなく、うつの症状もあり再就職はできていない。現在も無職のまま補償と貯蓄の取崩し等で生活している。
- ・ うつの原因は避難過程でのストレス、住民票他での役所の対応、自動車や家財道具の利用や移動の制限、思い出の品の盗難(一時帰宅のときに盗まれたと推定)、仕事を失い、技術や経験を活かせる場がなくなったこと、そして避難先の新潟県でコミュニケーションがうまくとれなかったことがある。現在でも夜は不安になり、明かりやテレビを点けたままでないと眠れない状態が続いている。
- ・ 避難後に血圧の上昇があったが、医者から運動不足を指摘されている。
- ・ コミュニケーションについては、近所の清掃会等へ参加する等、能動的な活動をしたが発展には至らず、子どもがいる若い親同士のようなわけにはいかないと、諦めている。

◆今後について

- ・ 災害復興住宅に昨年11月から移転。しかし、生まれ故郷の家はそのまま、自費購入した空間線量計で計測したところ、当時、家の中に干しておいた洗濯物を何度洗っても0.09~0.12の放射線が残ってしまう状態のままである。
- ・ 家の周囲は除染したと言われたが、家の中までは行っていないので、住める状態ではない。5年後に避難解除という話も聞くが、その頃、家は使える状態ではないと思う。

◆新潟県への避難について

- ・ 新潟県の避難先のほうが、今度の福島の災害復興住宅よりも何かと便利な地域だった。
- ・ 新潟県の雪についてはやはり慣れない。福島の住んでいた地域は30センチも降れば大雪という状態なので、会社を休む社員もいた。こちらでは車にしても車種が限られるかもしれない。

② 対象者 2

避難形態	世帯分離	性別／年齢	現在の職業	子ども有無(小中高)	経済状況	現生活満足度
区域内避難	世帯ごと避難	男性／40代	無職	有り	収入が減少	不満

◆避難経緯

- ・ 福島は持家で、現在、新潟県にも自己所有の自宅を構えているが、当初は借りたアパートの部屋数や広さの関係で父と母子で2か所に分かれていた。
- ・ 1年に3回の移動をとめない、家賃、電気料等の基本料金、互いに顔を合わせるための交通費と時間の負担、子どもが大きくなり部屋が狭くなったこと等で、賃貸等の費用をローンに充てることで、家族と一緒に暮らせる自宅を購入するという解決手段しかなかった。
- ・ 補償の書類等では配偶者のサインや押印も必要で、2世帯が別に暮らしている間は不便だったが、一緒に暮らすことで互いの安否も常に確認できるので安心できた。それでも、またいつ移動するかわからない不安もあり、今でも所有物や家財は必要最小限の購入にとどめている。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 被災前は地元の製造業の正社員だった。避難とともに会社は除染作業員の倉庫になり、本社への異動の話もあったが、子どもと離れ、遠くで暮らすことになるため、やむを得ず退職した。
- ・ 新潟に来て2年間は、自治体の非常勤職員として被災者支援の仕事をしていた。この頃から睡眠導入剤を処方されていた。任期満了後に、新しく製造業に勤めるようになったが、その頃から体調が優れなく退職せざるを得なくなった。眠れなくなり、精神安定剤も服用するようになったが、今も服薬しないと眠れない状態が続いており、再就職はまだ厳しい。
- ・ 症状が出るまでは避難のストレス、その後の申請書類の作成、地元の親類等との安否確認や顔合わせのための頻繁な帰省(週1回程度)が重なり、無理がたたった。さらに、生まれ故郷の環境(山間部で自然が豊富、朝日が見え、祭事がある)を離れた喪失感、こちらで新しいコミュニティが思うように築けないことなども原因としてある。
- ・ 子どもは小学校の頃に新潟へ転校することになった。子ども達はいろいろあったことを我慢し、耐えていたようで、その事実を最近知った。
- ・ 仮に物質面は補償金等で補われても、故郷や以前のコミュニティは戻ってこない。

- それでもお金で計られるというのは納得がいかず、風化させたくないという思いが強い。世間では収束したような雰囲気があるが、自分達はまだ避難中であるという心情から抜け出せない。
- 何か形に残さないとこの経験はキツイと今でも思う。子ども達が事実を再認識できるよう記録するのが一番伝わる方法だと思い、文章にしている。
- 家族で移動(一時帰省等)を考え新車を購入したが、特別視されているような気がする。自宅の購入も同様。マスコミ等で補償額の満額が示されることがあるが、実態を知らなければ誰にでも一律に支払われているという勘違いが生じる。職場でも月日が過ぎるにつれ「もう特別視はしない」という雰囲気になった。そういう周囲の見方やその変化も避難者にとっては負担になる。
- 相談相手がなく、家族に毎度言うのも難しい。避難者間でもその補償額等の差で亀裂が生じた結果、当初は相談相手がいたが、段々と相談もできなくなった。
- 福島の自宅に帰るにはスクリーニング済みとはいえ命がけ、家財を持ち出すにも避難先を汚染させてしまうリスクを意識するので精神的な負担である。
- 嫌がらせ防止のために福島ナンバーを変えたり隠したりする人もいと聞くと聞くが、自分は悪いことをしたわけではないので、そうするつもりはない。
- 被災前は親戚宅や友人宅等によく出かけたが、こちらでは出掛ける先がそうはできず、また正月等での集いの機会も減ってしまった。新しいコミュニティに馴染むというのは、入っていく側にとってはかなりの労力になり、子ども会や地区のイベントに参加してはいるが、いまだに地元住人の知っていることが私達には分からない。

◆今後について

- 福島の自宅は戻って暮らすことも貸すことも難しい。傷む一方なので取壊しも検討している。現在は固定資産税等を2か所で支払っており、税の二重払いの状態。取壊しにも資金が必要で、支援があるようだが受けられるかどうか不明である。
- 安全だと言われるようになったとしても、戻ったことで子どもの代で何か発症したら親の責任になる。避難までに少しは被ばくしたと思うので、子どもの結婚相手に迷惑が及ばないように等、考えてしまうこともある。
- 自宅も建てたので、新潟を第二の故郷にしようと思っているが、生まれ故郷や家はあるが帰れないという状態もあり、気持ちの整理ができていない。
- 同じ思いを他の人にさせたくない。再稼働の話があるが、地震や津波の被害と違い、放射能の被害は、故郷やコミュニティを元に戻せなくさせてしまう。

◆新潟県への避難について

- 雪はやはり不便。コンビニが近い等、便利であるが、川にホテルがいた故郷とでは住み心地が違う。

③ 対象者 3

避難形態	世帯分離	性別／年齢	現在の職業	子ども有無(小中高)	経済状況	現生活満足度
区域内避難	世帯ごと避難	男性／50代	正社員	無し	収入が減少	無回答

◆避難経緯

- ・ 被災前は持家（被災時で築 17～18 年）に妻と 2 人で暮らしていた。
- ・ 3 人の子どもは既に社会人で別居していた。（被災時は、関東方面など）
- ・ 被災直前まで出張で他県に行っていたが、一時帰宅した際にちょうど震災があった。
- ・ 被災後、長年出張で利用していた宿が新潟にあり、避難所を何度も移動するのが嫌だったので、そこをお願いして避難させてもらった。
- ・ しばらくして妻は他県の子どもの所へ避難させたが、自分は仕事があるため 5 月の連休くらいまで、その宿に滞在していた。その後、周辺の借家に 7 月くらいまで住み、借上げ制度が整った段階で妻を呼び寄せ、現在のアパートに移った。
- ・ 新潟が避難先になったというのは、仕事の繋がりがあったからで、それがなければどこに行っていたか分からない。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 被災前に比べて仕事での収入は下がったが、その差額分は賠償で埋め合わせができているから、収入の総額は被災前とほぼ同じ。
- ・ 被災前は持家だったが、現在はアパート暮らしのためストレスを感じている。被災前に住んでいた地域は田舎であったため、少し騒いだくらいでは隣近所に迷惑がかかるところではなく、また例えばペットを飼っていても迷惑がかかるということもなかった。しかし、現在のアパートではペットも飼えないということがある。
- ・ 被災前に住んでいた地域では、釣り等、自分の趣味を気軽に楽しむことができていたが、現在住んでいるところでは、何をすることも車で高速道路に乗ってどこかに行く必要があり遠い。以前は、山にしても、川にしてもバイクで少し行くだけで楽しむことができた。
- ・ 昔馴染みの隣近所とのスポーツを通じた繋がり等、近隣とのコミュニティがなくなってしまった。
- ・ 現在住んでいる借上げ住宅に引き続き住むことができるのか。周りで毎年 3 月に更新になっている人もいるが、その更新の案内がない。福島は借上げ制度があと 1 年と聞いているが、県によって対応が違うようなので不安。新潟県が今年で終了となった場合、また住まいを探さなくてはならない。

- ・ 新潟県では雪が厳しい。60代くらいならまだしも、70代以降、年を取ってから除雪する体力が果たしてあるかどうか。ましてや病気を抱えている自分では厳しいと考えている。
- ・ 人間関係、職場関係において妻がかなりストレスを感じている。環境が異なる上に、自分の行く先が見えない状態で仕事をしているからだろう。

◆今後について

- ・ 今後、地元に戻りたいとは思わない。今帰っても、馴染みのご近所も一人も戻っておらず、除染等、いろいろな業者の人がいるだけで全く知らない人ばかりである。顔見知りの人であれば信用できるが、そのようなあちらこちらから集まってきている人では誰も信用できない。夜は人気もなくゴーストタウンになっており、怖くて外に出られない。
- ・ 社会的なものとしてコミュニティの再生ができるのかが一番で、そう考えると、このエリアはまだまだ難しいと思う。
- ・ 発電所でも、いろいろと対策はしているだろうが、また何かあった時に本当に大丈夫なのか、不安感が拭えない。
- ・ 自分の家も除染はしたが、やはり雨どいの溜枳の辺りは線量計を近づけると結構高い数字が上がってくる。一時的に下がっても、やはり雨や風で、また数字が結構上がってしまう。今は子どももいないため、住む気になれば住めると思うが、そういう状況を目の当たりにすると戻って住むことは考えていない。
- ・ 妻に雪の苦勞をさせたくないため、宮城県から千葉県にかけた太平洋側に住みたいと考えている。息子も太平洋側に住んでおり、今は高速道路もつながっているため、太平洋側であれば行き来しやすいと考えている。
- ・ 今後1~2年くらいでどこに住むのか方針を固める予定のため、何か自分のちょっと欲しいものも我慢して、妻にもかなり切り詰めてもらっている。それで、何とか中古住宅でも求められればと考えている。
- ・ やはり「震災さえなければ」という気持ちがある。震災がなければ今とは全然状況が違っていただろう。

◆新潟県への避難について

- ・ 避難先が新潟県であってよかったと思っている。地域性もものすごくよかった。中越地震を経験していて、「避難」がどういうものを分かっている。他の避難者も同じことを言っていた。

(2) パターン B(区域内避難かつ世帯分離避難)

① 対象者 4

避難形態	世帯分離	性別／ 年齢	現在の 職業	子ども 有無 (小中高)	経済状況	現生活 満足度
区域内 避難	世帯分離	男性／ 60代	無職	無し	収入が 減少	不満

◆避難経緯

- ・ 被災前は飲食店を経営し、持家に高齢の母親と息子2人の4人で暮らしていた。娘は結婚して同じ町内にいた。
- ・ 被災当時、次男は新潟県で仕事をしていた。
- ・ 家は地震でほぼ全壊状態となっていた。
- ・ 地震の翌朝、娘が携帯電話で、原発が危ないという情報を入手し、風向きをみて、車で北に向かって避難を始め、福島県内の避難所で一晩過ごす。
- ・ 翌日、別の福島県内の避難所で姉や友人とも合流し、同時に初めてマスコミの情報にも触れる。
- ・ 原発が爆発したという情報もあって、その避難所にいた知人のアドバイスで、新潟県に入り、娘が新潟県内のとある民宿はタダで泊まれるという情報を携帯で入手し、そこで一泊した。
- ・ 次の日に別の地域の体育館に行き、スクリーニングを受け、同じ地域のコミュニティセンターの体育館を避難先として1か月ほど滞在した。
- ・ その後、避難所を転々とし、長男は7月になる前に福島に戻った。
- ・ その後、親戚家族が、後を追って新潟に来て合流したので、自分と母親と親戚家族3人の5人で、現在の借上げ住宅に移った。ただし、親戚家族は、もう福島には戻らないと決め、現在は新潟県内の公営住宅に移住している。
- ・ また、避難時に一緒にいた母親は他界し、息子達は福島県内に戻っている。そのため、現在は4LDKの借上げ住宅に独り暮らしをしている。

◆避難生活において困ったこと・苦勞したこと

- ・ 東京電力の対応には不満を感じている。
- ・ 福島の事故の検証、完全賠償と言うが、自分は精神的慰謝料を7年経ってまだ9か月分しかもらっていない。普通であれば、賠償手続等の連絡を入れるべきではないか。また、早期に手続をした人は何でも有利である。

◆今後について

- 来年の夏を過ぎたら福島県へ戻る予定。取りあえずどんな形でも戻ってやらないといけないと考えている。
- 福島県へ戻ったら、取りあえずまた飲食店を始める予定である。
- 今の時点だとまだ少しやる気があるが、お金儲けの商売ではなく、生きていくために少しあればいい、ぐらいの気持ちでしかできない。
- 放射線の問題があるので、若い人達は戻るべきではないと思う。30年経って戻るのならいいかもしれない。今、何も分からない時点で戻るのはちょっと危ないと思う。そのため、自分が戻ったことで子ども達や孫達が遊びに来て、何かあったら困るというジレンマもある。

◆新潟県への避難について

- 新潟県は、やはり中越沖地震で被災しているから、避難先としては日本一良かったと思っている。今でも交流所を作っていたり、毎年県主催で交流会を開いたりしていただいている。これだけでも大したものだと思っている。
- ユニゾンプラザで避難者を集め、何か月に1回か分からないが、いろいろなものを作って皆で食事をしたりと、そのようなことをやってくれるところは今はない。
- 一番良いところは、避難者の気持ちが分かっていると感じるところ。自分が入ったコミュニティセンターは中越沖の時も、中心地で最もひどかったところで、炊き出しは頻繁にあった。
- 体育館での避難生活は楽しかった、という語弊があるかもしれないが、体験したくてもできないものであった。そのため、体育館にいる人達は皆仲間のような感じで、今でも交流所で会ったりする人は、何となく仲間のような感じがある。

② 対象者 5

避難形態	世帯分離	性別／ 年齢	現在の 職業	子ども 有無 (小中高)	経済状況	現生活 満足度
区域内 避難	世帯分離	男性／ 60代	自営業	無し	収入が 減少	満足

◆避難経緯

- ・ 被災前は大きな戸建ての持家に9人家族で暮らしていた。家族構成は、祖母、両親、子ども2人、娘婿、孫2人と自分。
- ・ 仕事は専業農家をしていた。
- ・ 震災後、避難元の行政からの避難指示で福島県内の避難所を転々とした。
- ・ 娘の夫が、以前仕事の関係で新潟に来ていたこともあり、その職場関係の人達が「新潟に避難している」と言っていたのを知り、新潟県に避難した。
- ・ その後も、「これより良いところはないか」と探し、新潟県内でもホテルや避難所などを転々とし移動を繰り返した。
- ・ そして、避難所として開放されていたある企業の社宅で9月まで過ごした後は、借上げ住宅のアパートへ移った。
- ・ 4年前、同市内に作業場付きの中古住宅を自費で購入し、現在に至っている。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 当たり前の話ではあるが、被害者、加害者に関わらず、しっかり生きていかないといけない。大事なことは、津波があった、東電の事故が起きた、自分は避難した、何故こうなったのかということを検証し、ここから何かを学ぶべきである。学んだ上で、今後はどうするかと考える必要がある。
- ・ 避難はしているが、我々避難者には支援物資や慰謝料もあるので、どこにいても暮らせる。食費や光熱費以外はそれほどお金が掛かるわけではない。その辺りを履き違えて、人より多くもらいたいという感覚になっている避難者もいる。
- ・ 自分の場合は苦労ではなく、経験になると考える。考え方一つだと思う。そのため、いろいろな経験をした方が一生を生きていくにはいいと思っている。
- ・ 車を買に行った時、「県外者には売らない」という話をされた。つまり、これは避難者には売れないということ。自分は避難者だから、「それならしょうがない」と思った。また、農業委員会では「あなたに土地は貸せません」と言われたため、大変ではあったが購入することにした。

◆今後について

- 避難区域に設定される前までは、2~3 か月で帰れるかと思っていたが、避難区域に設定された時に、これは10年は駄目かなと思った。避難した時は60代前半だが、70代になってしまったら何もできなくなる。
- 農産物加工の事業を起こしたので、その事業が軌道に乗るまではこちらでがんばるつもりである。軌道に乗った後は分からない。この地域は雪深いから。
- 今のところ、避難元地域に戻るつもりはない。そこで農業をやって農産物が売れるかという問題が一番ネックとなっている。
- 避難元地域の復興には、農地をしっかりとやらなくてはならないという話はいつもしている。全体の3分の1ぐらいは津波でやられており駄目だが、残ったところでしっかりしなくてはいけないと考えている。
- 避難元地域の人達が来て何回か懇談会をやっているが、参加する人がいない。自分はその行行って、建物をいっぱい建てれば維持管理費がかかる。それを戻った人達で負担していたら税金が2倍、3倍になって跳ね上がってくるので、街を集約してコンパクトタウンにするしかないと言っている。

(3) パターン C(区域外避難かつ世帯ごと避難)

① 対象者 6

避難形態	世帯分離	性別／年齢	現在の職業	子ども有無(小中高)	経済状況	現生活満足度
区域外避難	世帯ごと避難(単身)	男性／70代	無職	無し	収入が減少	無回答

◆避難経緯

- ・ 20年前ぐらいに他県から福島に移住してきた。会社に勤めていたが、非常に忙しく、ある程度の年齢になったら田舎暮らしをしたいということもあり、ちょうど50歳前ぐらいの時に退職した。全く地縁もない所だったが、田舎情報誌のようなものを見て移住してきた。
- ・ 被災前は戸建ての中古の持家に独り暮らしをしていて、仕事はパートタイムのサービス業で自分の都合のいい日数と時間で勤めさせてもらっていた。
- ・ 地震の時は家自体の被害は少なく無事であったが、自分が住んでいた市町村は緊急時避難準備区域に指定され、避難ということになった。
- ・ マイクロバスでどこかの避難場所にまとまって避難するという話だったが、自分は集団行動がストレスになってしまうので、とある地域に適当な事務所があったので、まずはそこに避難をすることにした。そこは寝泊まりできるような場所であったため、3～4日間くらい滞在し様子を見ることにした。
- ・ その後、東京から新潟へ移住した仲間がおり、「取りあえずこちらに来ないか」と言われ、福島から自家用車で向かうことにした。
- ・ その友人とはかなり親しい間柄ではあったが、いつまでもいられないというのもあり、いろいろな方面に当たっていた。たまたま、移住した仲間がおり、その繋がりで紹介してもらった人に連絡を入れたところ、「ここは限界集落で空き家もある」という話になり、そちらに引っ越しをした。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 今住んでいるところは結構大きな家で、2階建てで部屋が8部屋もある。仲間とかいろいろな人が頻りに泊まりに来て、そこでいろいろなミーティングを行ったりするには便利で、寝泊まりもできる。また、自然も素晴らしい。しかし、びっくりするほど、雪が降るところである。屋根からの雪下ろしがかなり大変で、家の周りから全て一人でやっていたが、70代に入り、これから先は少し自信がない。

- ・ 緊急時避難準備区域は早い段階で解除になり、そこで補償等は全てストップしている。当初の慰謝料と、約2年間の休業補償のようなものはもらったが、完全に今は何もない状況である。
- ・ 避難元地域の家は500mぐらいの高台ということもあり、スポット的に放射線量が高いところがある。国の方針としては、原発からの距離だけでバサッと補償を切るようになったが、同じ市町村でも完全な避難区域と、避難解除されたところが、家1つで区切られている。そこでの補償問題がある。我々のところは早くに打ち切られた。
- ・ 自分は1人で、集団避難はしなかったので情報不足もあった。当初避難した人達全員に、借上げ住宅の補償があったが、自分の思い込みで、新潟では補償はないと誤ってしまった。それを知らず、途中で気付いて連絡を入れた時には申込みの期限を過ぎており、駄目という話になった。

◆今後について

- ・ 今は全く仕事をしていない。近所の人達の関係で、お手伝い等はさせてもらっているが、基本は年金だけで暮らしている。精一杯働いたつもりなので、今はもっと別にやりたいことがある。
- ・ この先どうするか、いろいろ考えているところである。もうあまり時間がないため、今後1年ほど考え、結論を出さなくてはと思っている。
- ・ 物理的、体力的に厳しくなった段階で、取りあえず戻るとしても1つの選択肢としてあると考えている。ただ、あちらには家があるというだけで、そこで農業をやるという気持ちはない。
- ・ 今の住まいの家賃は1万円ほどだが、日常の生活をする分には、月に大体8万円くらいで生活できる。趣味の山登りもそれほどお金は掛からない。ただ、大した蓄えもなく、そういう意味では何かあった時の不安というのはつきまとっている。
- ・ 今考えているのは、住んでいる所から少し行くと雪が少ない所がある。そこではある程度年齢を重ねたとしても、屋根の雪下ろしが必要ないため、そのような所で住めるところを探している。

◆新潟県への避難について

- ・ 日本海側に住むとは夢にも思っておらず、半年ほどは落ち込んでいたが、仲間もたくさんでき、頻繁に山に登ったりできるので気分転換にも良く、四季も感じられ、生活するには素晴らしいと感じている。

② 対象者 7

避難形態	世帯分離	性別／年齢	現在の職業	子ども有無(小中高)	経済状況	現生活満足度
区域外避難	世帯ごと避難	男性／50代	正社員	有り	収入が減少	不満

◆避難経緯

- 被災前は持家に妻と娘と息子の4人暮らし。築8年の一戸建てを購入して1年も経たずに震災に遭った。
- 仕事は外回りの販売業。
- 避難を決めたのは被災から1年後。自宅周辺も放射線量はかなり高かった。果たしてこのままでいいのか、という思いで状況を見ていたが、下の子の幼稚園の卒園とともに決断し避難した。
- 妻の実家が福島県内だったこともあり、そちらへの避難も考えたが、家賃が問題であった。県外に避難すると、家賃を負担してくれるという話があり、新潟県への避難を決めた。
- 最初の避難は、妻と娘達の仮住まいという感じだった。自分はその間、福島県に残って仕事をしていた。
- その後、避難生活の中で、妻がストレスで精神的な疾患になってしまった。避難先では知り合いがおらず、誰の手も借りられなかったため、自分も福島県での仕事を辞めてこちらに来た。
- 新潟に来てからは、同じ市町村の地区内で、学校も変わることなく転々としていた。自分の仕事もこちらで何とか見つけられたため、福島県の家を処分することとなり、今の家を購入した。購入を決めた理由は、ペットを飼っているということもあった。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- 物件探しは、今思うと、少し見当違いの場所を探していたように思うが、当時自分は福島県から通いで移転先を探していたため、上手くいかなかった。
- 避難して最初に住んだ家は結露がひどかった。そこには2年住んだが、福島県から持って行った家具が全て台無しになってしまった。
- その後、別の家に移ったが、そこも湿気と結露がひどく、結露したところがシミとなり、そこがカビてしまう状況であった。不動産屋に聞いたところ、新潟はこんなものですよと言われたが、どの住宅も、それほどの結露や湿気で悩まされてはいないと思う。

- ・ 収入は以前の半分以下に落ちた。今まで 30 年近く働いてきた実績があったため、こちらでも同じような仕事に入ったが、どうしても企業規模が小さなところしかなく、実際、採用してくれたのはそこだけであった。年齢的な問題で、やはり 50 才近くでは再就職は厳しいと感じた。妻も専業主婦から、現在は、働いているが、二人を合わせても前の収入に追いつかない。
- ・ 福島県で仕事をしている間、新潟県へは車通いの状態だったが、その間に自分の車も妻の車も壊れてしまった。
- ・ 下の息子は新潟っ子だが、上の娘は中学に入ったばかりの頃は誰とも口をきいていなかった。年頃の娘で方言がネックとなり、中学 3 年間はあまり友達も作らず家にもりきりという生活であった。ただ、地域が良かったのか、いじめられるということはなかった。高校生になって一変し、周りに友達がいっぱいできたようで明るくなった。
- ・ この収入では子どもを大学に行かせてやれないというのが現実である。生活するだけで大変なため、何か手助けしてもらいたいということがある。以前の会社の退職金や、保険も全て解約してやっているが、貯蓄が減っていく一方である。

◆今後について

- ・ 子どもが来年度、中学校に入る。また、自分は定年間近のため、帰還についてどう考えていくかということだが、新潟で購入した家のローンが残っているので今は出て行くことができない。
- ・ 下の息子が小学校 1 年生から新潟にいるため、ここでずっと過ごさせたいという思いがある。また、今更福島県へ帰っても、また仕事を探さなくてはならないということもある。
- ・ 生まれ育ったところに戻りたい気持ちはある。子どもが高校生、大学生と、ある程度になれば、ここにいるかどこかに行くかは分からないため、それまでは新潟にしようと考えている。自分の定年を境にどうするか考えていこうと思う。

◆新潟県への避難について

- ・ 有り難いことに今仕事で行っている地域が皆さん温かい方で、自分が福島県出身であることを伝えても受け入れてくれる。

③ 対象者 8

避難形態	世帯分離	性別／年齢	現在の職業	子ども有無(小中高)	経済状況	現生活満足度
区域外避難	世帯ごと避難(単身)	男性／40代	正社員	無し	収入が減少	満足

◆避難経緯

- ・ 原発事故後、放射線量について調べると危険なレベルに思えた。本当は福島にとどまりたかったが、将来の自身の健康等を考えると事故から1か月間で恐怖と言えるほど不安になり、2000年頃に生活していた経験のある新潟県に自主避難した。
- ・ 新潟県で仕事のコネクション等は一切なかったが、経験者ということで同じ業種に正社員（被災前の福島県では非正規社員）で採用された。また、新潟県出身の現在の配偶者に出会えた。
- ・ 新潟県には以前暮らしていたため、友人もおり、また、地理や気候も承知していたことから環境変化のギャップは幸い少なかった。
- ・ 自分は地震や放射能に不安を感じるが、心療関係に通院や服薬するほどでないのは、早くに自主避難をしたためだと考えている。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 自主避難のため、避難しなかった福島の人達との連絡が取りづらい。SNSでの時候の挨拶程度で、それすらなければ一切の連絡が途絶えてしまう。身の危険を感じて避難した自分と、承知しつつも避難できなかった人等、それぞれの思いがあり、簡単には解消できない。こちらからも声を掛けづらく、あちらかも言い出しづらいという関係になってしまっている。
- ・ 幸い、避難先の新潟県に知人がいて仕事があり、結婚もできたが、故郷の友人達とのつながりを失ったという意識は大きい。壊れた人間関係はそう簡単には戻らない。
- ・ 自主避難なので、県民一律の少額な金額以外の主要な補償はなく、家賃なども全て自分で支払っている。
- ・ 福島県は地震が少ない地域だったが、あれだけの地震とその後の原発事故の経験で、少しの振動でも気持ちが落ち着かなくなってしまった。それまで気にしていなかった原発の勉強もするようになったが、楽しいことではなく、ある病気になった人がその病気について、不安のあまり調べる生活を続けてしまうようなものである。

- ・ 地震のニュースがあると、その地域の近くで、どの原発が何基あり、想定できる風向きから事故が起きればどの地域が危険か、等まで考えてしまうようになった。それだけ本来は楽しむべき時間を奪われてしまっている。特に福島での地震のニュースは、また何か起きるのではないかと不安になる。
- ・ 原発再稼働の動きが出てきているが、再稼働すれば精神的な不安になる。

◆今後について

- ・ 両親が福島にいたので、帰郷して暮らしたいという思いはあるが、もう4年も帰っていない。子どもだけじゃなく、親の年代でもいじめのようなものがある。これまで田舎特有の仲の良さがあっただけに、放射能の危険への不安で出て行ったとしても、戻れば戻ったで、「あの人は避難して戻ってきた人」と言われてしまう。
- ・ 福島に帰っても職がないかもしれないし、放射能は本当にもう安全なのかという疑問もあって福島に帰れない気持ちがある。それは原発事故から1か月の間の恐怖体験が大きく影響していると思っている。
- ・ 今後についてはまだ答えが出せていない。

◆新潟県への避難について

- ・ 福島県でもそれほど寒くない地域、雪の少ない地域から新潟に来た人は雪や気温で苦労していると聞くが、出身地のほうが最低気温は低く、雪も多い地域だったので、天候に関しては問題にはなっていない。
- ・ 山形県も避難先の候補に考えたことがあったが、新潟県は早期から避難者の受入れ体制があり、不動産屋にもそういう物件が用意されており、手厚い内容で助かった。現在の住まいも震災対応で探した物件である。ただし、家賃は全て自分で払っている。
- ・ 柏崎刈羽原発は絶対に再稼働させたくない。再稼働を阻止するためにも今の知事になってもらっているという意識がある。

(4) パターン D (区域外避難かつ世帯分離避難)

① 対象者 9

避難形態	世帯分離	性別／ 年齢	現在の 職業	子ども 有無 (小中高)	経済状況	現生活 満足度
区域外 避難	世帯分離	男性／ 40代	非正社員	無し	収入が 減少	無回答

◆避難経緯

- ・ 被災前は福島県内のアパートに妻と娘と 3 人で暮らしていた。
- ・ 住んでいたアパートの地震による被害は外観上はほぼなく、室内では食器棚から食器が落ちたり、電気スタンドが壊れたりといった損害を受けた。
- ・ その後の原発事故により、家族会議を行い、放射能の汚染が怖いという話になった。また、住んでいたエリアがホットスポットという放射線が高いエリアになっていた。
- ・ 自宅をガイガーカウンターで計測すると、雨どいの下、玄関、部屋の中等で 5～10 マイクロシーベルトであった。
- ・ 当時、福島県で仕事を探していたが、状況を見極めながら日々不安とともに過ごしていた。
- ・ いよいよ自主避難を決定したのが 9 月～10 月。当時は失業給付を受けながら、妻はパートをしていた。11 月に引っ越しの段取りをし、12 月に引っ越して現住所に至る。
- ・ 新潟を選んだ理由は、身寄りや親戚はいなかったが、海水浴等で遊びに来ていたこともあり親近感があった。先に避難してきていた友人がいたので、こちらの環境等を聞き、冬以外は過ごしやすいことや、帰省も札幌や東京、名古屋、京都よりは距離が短くて済む。仙台も第二候補だったが、放射能の汚染が少しあり、その点、新潟は平常値のため、それも決め手の 1 つになった。
- ・ 現在の住まいは借上げ住宅に住んでいる。当初は娘と 3 人だったが、現在、娘は上京して働いており、今は妻と 2 人暮らしである。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 引っ越し当時、娘は高校 1 年で、途中での転入が難しく、そのためには簡単な入試が求められた。また、いじめも心配だったこともあり、年度途中ではなく 2 年生になってからが良いということで、義理の父と母にお願いし、そこを寮替わりにして、娘は 1 人で 3 月の春休みまで福島県で過ごした。自分と妻のみ先に新潟県に来て、求職活動等をしていた。

- ・ 妻が時々、うつようになってしまう時がある。娘が生きがいだったが上京したため心に穴が開いたようで、また、新潟特有のすっきりしない天気もあり、メンタルの不調を繰り返すようになった。
- ・ 娘の編入した高校は、資格や学びの内容等、良いカリキュラムがあり、そこは良かったが、肝心な人間関係はそれほど良くなかった。いじめはなかったが、なかなかコミュニティを築くことができなかった。
- ・ 当面は今の生活を継続したいという思いもあるが、やはり金銭面の不安が大きい。今、月3万円の補助が福島県から家賃補助で、家賃が6万円なので半分、それが来年度は3分の1、つまり2万円になるので、収入が来年度も変わらなければ生活は苦しくなる。

◆今後について

- ・ 将来的には戻りたいと考えている。現状は今の仕事を続けたいが、フィールドを変えて、そういった業務に就きたいと考えている。
- ・ 遅かれ早かれ、費用的な負担は年々増えていくことを考えると、早いタイミングで帰還すること、戻って自分の土台を再構築していくほうが大事だと考えている。
- ・ 故郷には両親がおり、今は健康だが、将来的な介護等も近くにいたほうがお互いに安心できるので、その辺りのタイミングも考えている。
- ・ 戻るとなると、年間契約の区切りタイミングと考えている。仕事を途中で投げられないので、そのタイミングでどうするかを、毎年、毎年判断していかななくてはならない。生活のためにはブランクも開けられない。

◆新潟県への避難について

- ・ 新潟の人は良いと感じている。こちらに友人もできた。プライベートでは充実している。ただ、故郷の旧友や友人はいないので、時々寂しさでストレスを感じる。
- ・ 環境としては、新潟県の曇りがちな天気が多いという特有の天気にはいつまでも慣れない。福島は東京のように、常に正月は青空という環境であった。
- ・ 結果論になるが、友人や今の仕事に出会え、資格も取れた等、新潟県に避難してきて良かったと思っている。

② 対象者 10

避難形態	世帯分離	性別／ 年齢	現在の 職業	子ども 有無 (小中高)	経済状況	現生活 満足度
区域外 避難	世帯分離	女性／ 40代	自営業	有り	収入が 減少	無回答

◆避難経緯

- ・ 被災地では持家の戸建てに、夫と3歳の子どもと一緒に暮らしていて、被災時に次男を妊娠していた。夫は自宅でテレワークをしていた。
- ・ 自分も自宅でできるインターネット関係の仕事で、夫婦で福島を出て別の場所に移っても仕事が継続できることから、夫の主導で家族一緒に避難した。周囲に相談できる相手がいたわけではなかったが、取引先の人等から妊娠を理由に避難を勧められたこともある。
- ・ 近年は夫のみ福島に戻ったため、新潟県に残った母子との二重生活となっている。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 福島の持家の維持費やローン、夫の生活に関わる光熱水費と、新潟県での母子の避難生活に関わる経費(アパートの家賃、生活費)との二重負担となっている。
- ・ 福島県から3万円、新潟県から1万円の補助も含め、収入の減少は避けられているが、生活費が上昇してしまっている。自宅の売却は諸事情で難しく、補助費が下がる、あるいは打ち切りになることで、現在の2拠点での生活を断念せざるを得ない場合もありうる。
- ・ 自分には子どもつながりで新しい友人ができたが、夫は終日自宅での仕事のため、そのようなつながりができず、寂しさのようなものも感じていた様子があった。また自分の建てた家にいたいという思いもあったようで、福島に帰った。
- ・ 「自主避難する」と親戚に話ただけで変わり者扱いにされるほど田舎なため、福島の友人達、近所の人達とのコミュニケーションは絶たれた状態のままである。それがつらく、引っ越し当初は毎日泣いて暮らしていた。
- ・ 自主避難のため、引っ越し後も声高に怒りを叫ぶことも、思いを口外することもできず、精神的には強制避難のほうが助かったかもしれないと思うほどである。今でも自主避難の判断が正しかったのかどうかの迷いがある。
- ・ 賠償金は、もらえた、もらえないで地域を分断すると感じた。
- ・ 原発が起こした事故だが、それまでそういう危険な存在を知りながら気に留めていなかった、知ろうとしなかったことをすごく反省している。子どもたちには申し訳ないという思いもある。

◆今後について

- ・ 家族一緒だったが、夫のみ先に様子見の意味も含め福島へ戻り生活している。夫の本音は新潟では友人等がいなかったためだが、しかし自分はどちらかといえば戻りたくないと考えている。理由は健康面が一番で、放射線量は低下したようだが、本当に信じていいのか、子どもが外で遊ぶ年齢のうちには不安で帰れない。
- ・ また、福島県の地元のコミュニティから覚悟を決めて出てきてしまったため、簡単には戻れないという意識もある。自分も夫も友人とは気軽に連絡は取れておらず、自分達だけ避難してきたという負目のような意識を感じている。
- ・ 子どもが就学期間のうちは、福島に戻ると「出戻り」扱いでいじめられたり、コミュニケーションが取れなくなったりするのではないかという不安もある。田舎のため、小学校からの同窓組が多く、中学からの転入も難しい。親の判断で避難させたのだからという、子どもに対する責任もある。しかし、補助の減額や打切りでそうも言ってもらえない状況もあり、難しい選択を迫られつつある。

◆新潟県への避難について

- ・ 新潟県での就職まではまだ考えていないが、食べ物はおいしく、人も良く、大変有り難く感じている。
- ・ 一時期、子どもをばい菌扱いされる報道で、かえって注目されていじめに発展しないかが心配だったが、新潟に来たのは子どもが小学校へ入学前だったので、避難者ということを学校の友達は知らなかったこともあって何もなかった。
- ・ 中越地震で山古志村が被害を受けたとき、避難するしないで住民が分かれたのを、村長が全村避難として、その後の復興で村民がひとつになることができたということを知り、山古志の復興交流館で聞いた。その話を人に話すときはいつも涙してしまう。
- ・ 雪は当初驚いたが海の近くなのでそれほどでもない。また、子どもに畑仕事をおおして、土の大切さや福島で起きてしまった汚染のことを伝えている。

③ 対象者 11

避難形態	世帯分離	性別／ 年齢	現在の 職業	子ども 有無 (小中高)	経済状況	現生活 満足度
区域外 避難	世帯分離	女性／ 40代	非正社員	有り	無回答	満足

◆避難経緯

- ・ 夫と自分と子ども 4 人(幼稚園児 2 人、就園前幼児 2 人)で戸建ての賃貸住宅で生活していた。震災で水道等が使えなくなり、主人の父母宅へ避難、その後、原発事故の報道の高まりとともに、一時避難を繰り返しつつ、卒園後に本格的な避難として新潟県に自分と子ども 4 人が先に転居した。夫の仕事はフリーランスだったので、月に 1、2 回避難先のアパートに来ていた。
- ・ 当初のアパートは家賃 3 万円の 2K と狭く、泣き声等の苦情の問題や、通院で他の市町村に出ること等も多かったため、1 年 4 か月後、福島賃貸を引き上げてきた夫とともに通院先の市町村へ引っ越した。
- ・ 2017 年 5 月に夫は福島県のある団体職員となり、単身で実の父母の家に暮らすようになったことで現在は 2 拠点での生活になっている。単身帰郷の理由は、復興関係の仕事がしたかったことと、年老いた父母を気遣ってのこと、そしてやはり地元に戻りたいという意識も強かったようである。
- ・ ただし、自分は放射能の心配から子どもが高校を卒業するまでは新潟で暮らしたい。また、福島県に暮らすとなると夫の実家に入ることになり、夫の実兄が頻繁に立ち寄るなど堅苦しさもある。正式に相談もなく福島に戻った夫との確執がないわけではなく、子どもの意見も含めた話し合いが必要であると考えている。

◆避難生活において困ったこと・苦労したこと

- ・ 新潟県内で避難先を移転したことで、避難者の借上げ住宅制度が適用されなくなり、賃料が自費になってしまった。夫からの仕送りと自分のパートの賃金等でやりくりしている。
- ・ 母子と父親の地理的な距離が開いてしまった。夫は収入が下がってしまったが、福島県で仕事をしつつ、不足分を補うために会社の許可を得てフリーランスの仕事もしている。忙しいこともあり、「新潟には来られるときに来ればいい」ということにしたが、毎週のように父と子が会えているわけでもない。

- ・やはり問題は子育てで、小学生の末っ子は新潟しか知らないので出たくない、真ん中の2人は祖父母宅なら帰りたい、一番上の子は中学生で、また転校で一からやり直すのは嫌だと主張している。住む土地や通う学校が変わると、勉強にも部活にも打ち込めないのではないかという心配もある。親(夫婦)だけの立場や意見で転居することはできない状況になってしまった。

◆今後について

- ・自分は新潟で仕事(パート)が見つかり、融通が利く職場でもあり、市営住宅に移り住めば、このまま子どもを18歳まで新潟で育てられるという意識が強まってきた。周囲には、単身赴任家族や子どもを育てながら、互いに離れて暮らしている避難者夫婦もあり、また福島に戻った後に離婚した夫婦等の例も知り、このまま2拠点での生活も悪いことではないと思うようになってきた。
- ・夫婦間でまだ正式にこの件について話し合っていないので、子どもも含めて決めていかなければならない。正月には一時帰省するので、その時に話合いがあると予想すると、出向きたくないという思いもある。どちらかといえば、新潟にとどまる気持ちが強くなってきてしまっている。
- ・避難元地域が利便の良さ等で人の流入が増えており、前と同じ賃料で住宅を借りるのは難しく、また、夫の収入に下がったため、戸建てを買う資金的な余裕もなく、夫の父母の実家に同居でやっていけるのかという不安もあり、帰還については迷っている。
- ・夫の父母宅では、最近自分達の畑で取れた野菜を食べ、以前はミネラルウォーターを購入していたが、今は水道水を使っている。帰省時等、一時的には食べられるが、毎日となると心配であり、それも新潟に踏みとどまっている理由の一つになっている。
- ・当初は母子ともに全員、福島に戻るつもりだったが、2017年の春休みに家探しから引っ越しまでの時間が取れなかったことを機会に、長男の気持ちを重視し、自分と子ども達はこちらに残ると意識が次第に強まってきてしまった。

◆新潟県への避難について

- ・引っ越したことで借上げ住宅が適用されなくなったことは残念だったが、それ以外、新潟の人は震災の経験から優しく接してくれる人が多く助かっている。
- ・最初に借りたアパートの大家さんとは今でも親交があり、新米を送って頂いたり、子ども達にはお年玉を頂いたりしている。
- ・福島との2拠点での生活になっても、子どもの春休み等に帰ることができる距離に新潟があることも重要であると感じている。